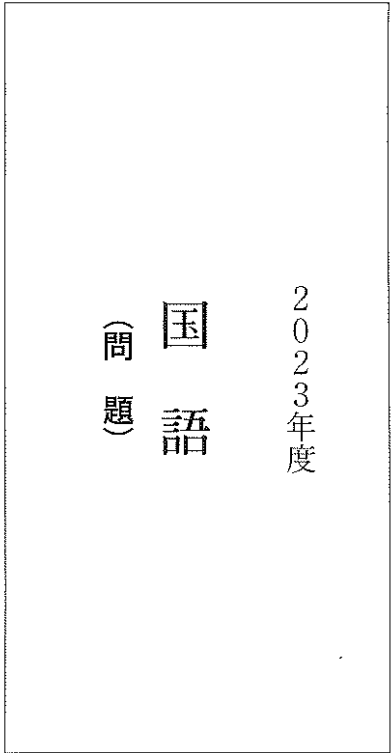




< R05172081 >

注意事項

- 一 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
- 二 問題は2～9ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 三 解答はすべて解答用紙の所定欄に、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
- 四 受験番号および氏名は、試験が開始されてから、解答用紙の所定欄に正確に丁寧に記入すること（左の記入例参照）。所定欄以外に受験番号・氏名を書いてはならない。
- 五 受験番号の記入にあたっては、左の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。読みづらい数字は、採点処理に支障をきたすことがあるので、注意すること。

(記入例)

5 7 0 0 1 番



万	千	百	十	一
5	7	0	0	1

(数字見本)

0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

- 六 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- 七 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き、解答用紙を裏返しにすること。
- 八 いかなる場合でも解答用紙は必ず提出すること。
- 九 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

— 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ところで英語の *at home* には「家に居ること」「在宅すること」の他に「寛いで、気楽に」などという意味もある。このような根本的気分を、哲学者・教育学者であるボルノー (Otto Friedrich Bollnow) は「Geborgenheit」としているが、邦訳では「被護性」と訳出される。「Geborgenheit」は、動詞 *bergen* (隠れる、埋蔵するなどの意) の過去分詞を名詞化したものである。そして、*ge-* という前綴りに示されるように極めて受動的なニュアンスが強いものである。その点から考えると、被護性の「被」という字の意味は深く、すでになにかによって「護られて在る」というような受け身の解釈とともに、「Geborgenheit」によって人間の世界における位置を見出すことができる。すなわち人間はすでに A ということである。

また、*bergen* の「隠され、蔵され、大切に保存される」という意味はくつろぎやすさ、気楽などという人間の根本的な気分に派生する。*at home* が在宅しているということ、その家がやすらぎの場であるという意味合いはまさにこれに基づく。

では、やすらぐとはいかなることであろうか。「心がゆったりと落ち着いて穏やかなこと」であると辞書には記されている。また、やすらぎという言葉に漢字をあてた「安」の字源をたどれば、家に女性を落ち着かせるさまを示し、ひいては静かに落ち着いていることを意味する。 イ

ハイデッガーは「Geborgenheit」を根本的な気分であるといい、存在論の立場からハイデッガーの影響を受けたボルノーも気分については「精神生活の最下層」にあると規定し、気分感情と明確に区別した。すなわち感情とは「常に特定の対象に志向的、具体的に、方向づけられているもの」であるのに対し、気分は決して一定の対象を持たないものである。また、気分は「人間の最低の領域から最高の領域までを、全体的に一様にかんてツする根本的な状態を示す」のであって、その人間の活動全体に色調をあたえてしまうという。ここで重要なことは、気分が精神生活の基礎に位置し、「人間の生が自己自身を知るに至るもつとも単純でもつとも根源的な形態である」ということである。

なお、ハイデッガーによれば、人間という存在はあるものに会って何かを認識したり、特定の感情を持つのではなく、それ以前にそのつどそのつどすでに気分づけられ、根源的にそれらに包まれ関係性を結びつつ意味連関しながらすでに出会っているという。このハイデッガーの気分についての解釈は、B 理性や意識に対しての否定的な見解ともとれるものであり、気分の主位性や根源性に依拠する考えである。その点から考えると、ハイデッガーとボルノーの気分に関する思考の差異は大きい。前者が人間存在が常に死にさらされていることへの不安や不確かさを視座に置いているのに対し、後者は昂揚した気分として、生への歓びを視座に置いている。

とりわけボルノーは幸福な気分について「人間の幸福な、あるいは少なくとも安らかな気分は、一般にものや人間の内的完全性やそれ自身に安らう独自の本質が開かれるただ一つの通路である」と述べ、ハイデッガーと対照的である。 ロ

しかしながら、これら幸福な気分もまた、「明示できるような理由なしで、こつそりとそれは人間の中に生じてくる」ものであり、いわば人間を襲うものであるとしている。さらに「人間はその幸福な気分を自ら生み出すことはできない」ともいう。

まことに絶望的な示唆ではあるが、それでもなお、人間の生活はこのような時空に在り、家庭ほど衣食住などの生活の営みが日々繰り返されている時空はない。たとえば、ホテルや旅館などの宿泊施設や飲食店などは、非日常性を演出しつつも、他方では常にくつろぎ、やすらぎを得られるようなしつらいを作り出す。人々は家以外でもそのような雰囲気を持つ空間、そのような雰囲気を感じ出す場所を体験するのであるが、これらが意図され

た演出であり、配慮された時空であるとわかっていながら、くつろぎやすさや気分が瞬時でも誘われることを楽しむ。しかし、家庭を想起させる擬似空間がやすらぎの本拠となれないのは、その空間がそこにいる人間にとっては一ひとときであり C であるからである。すなわち、そこに自らが積み重ねてきた歴史や時間そのものを全面的に十分に委ねられないのである。人間は環境を移動することによって、そのつど異なる体験をさせられているのであり、日常では学校や職場、家庭などでその場に対応すべく心身の緊張や弛緩を繰り返している。しかしながら、個々の時空における体験や歴史は、家庭に居る時間とは比べものにならないくらい小さな存在でしかない。

ハ

ボルノーは人間の住む空間を内部空間と外部空間というように、ウチとソトを分けて考え、外部空間は常に内部空間を脅かすものとして、家庭はともすると緊張や厳しさを強いる外的空間からのシエルターのような役割も担っていると考えていた。確かに、現代社会の生活の一部がこうした側面をもっていることは事実であるが、内部空間それ自身が、すでに家庭崩壊などでやすらいだ空間にもなり得ていないことは周知のことである。

また、コロナ禍にみられるように外出が制限され、オンラインによる在宅勤務や授業という状況になると、外部空間に在ったものが家庭という内部空間に一気に侵入してくる事態が生じてきた。

疎外 (alienation) は本来、自分がそこに居ながら自分自身を見出すことのできない、世界と自分とのよそよそしい関係にある状態を示すものであるが、今日では、疎外が外部空間のみならず内部空間にも生じ、いつもとは異なる外部空間に避難したり、web上のバーチャルな世界に安息と平穏を求めることもまれなことではなくなった。すでにウチとソトという概念は突き破られ、家庭自体もどこかに漂流しているともいえる。

二

そして何より人間がなかなか主位に立てないウイルスの出現は、人間の生や死に対する根本的な恐れや不安、畏れを露呈させてしまったといえよう。今まで意識していなかった何ものかによって支えられていた生活世界への根本的な信頼が不安定になったのである。人間が世界の中心であるという人間観はすでに過去のものになりつつある。現実には人間が世界の中心となって秩序づけるといようなことはあるが、それは根源的な世界を無視してのことであった。すなわち、人間を中心に据え、世界の事物を遠近法的に価値づけることを一旦排除し、それぞれが固有なものとして立ち現れてくる世界、この固有な世界を尊重してこそ人間が包まれている世界の中で、初めて住まうことができるのではないだろうか。

近代社会は「欲求の充足」を一つのバロメーターとしてきたが、ともすると傲慢な人間の態度を助長することにも通じていた。その世界に住まうということは支配することでもなく、持つことでもない。自然に対する保護者として、共に在る者として、人間自らの位置を捉えなおすことにより、世界への配慮や畏敬の念が出てくるのである。コロナ禍で大きな崩壊が生じる家庭もあれば、そうではなく関係性や在り方を問い直す家庭もある。今、人々はその試練に向き合っているといえよう。

ホ

なお家庭が厳しい状況に在る時、国家は支援もするが、時に家庭は国家の基盤として位置づけられることから、権力者としての他者である国家に管理され介入され利用される存在にもなり得る。冒頭の問「[STAY HOME]というビョウゴに筆者がこだわったのは、人間としての自由と独自性が家庭に在ると信じたと思うからである。しかし、ホームはステイせずにもこのまま漂流してゆくかもしれない。私たちはいったいどこでやすらぐのだろうか。」

(川上雅子『家庭という時空』による)

問一 傍線部 a「カンテツ」、傍線部 b「ヒョウゴ」のカタカナにあてはまる漢字を楷書で記せ。

問二 空欄 A にあてはまる語句として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、その記号を記せ。

- ア 宿命的な役割に拘束され存在する
- イ 原初的な言葉に規定され存在する
- ウ 可変的な関係に操られて存在する
- エ 根源的な時空に護られて存在する
- オ 受動的な感覚に慣らされ存在する

問三 傍線部 B「このハイデッガーの気分についての解釈は、理性や意識に対しての否定的な見解ともとれるものであり」とあるが、どのような点が「否定的」であるのか、その内容としてあてはまる最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、その記号を記せ。

- ア 気分が人間の精神状態において他者からの影響でやすらぎやくつろぎを生み出すと、家庭や学校で教育によって形作られた理性や意識による判断が揺らいでしまう点。
- イ 気分は本来、人間の精神生活においてはとらえどころのないものであり、理性や意識はその形成過程が明らかなので、双方を比較するのは不可能であるという点。
- ウ 気分が人間の精神世界において果たす役割は幼少期の感覚に限定されているが、理性や意識は大人の判断や行動の規範を形成する支配力を持っている点。
- エ 気分は人間の精神状態において他者からの影響によって移ろいやすいのに対して、理性や意識は人生経験によって体得されるので変えようがない点。
- オ 気分が人間の精神活動において根源的なものとして形作られているために、学びや出会いによってもたらされた理性や意識の影響は、より軽いものに止まるという点。

問四 空欄 C にあてはまる言葉を二字以上五字以内の漢字で記せ。

問五

傍線部D「すでにウチとソトという概念は突き破られ、家庭自体もどこかに漂流しているともいえる」とあるが、その説明としてあてはまる最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、その記号を記せ。

ア Web上のバーチャルな世界の登場は、人が自身の内部空間と外部空間の境界を意識することの意味を失わせ、家庭における各人の役割も家事の代行などで交換可能なものとなったので拘束力が低減したということ。

イ 家庭が内部空間であり職場や学校が外部空間であるという区分けの意識は、SNSの個人生活に果たす役割の増大や、オンラインによる在宅作業の日常化によって流動し、家庭のありかをとらえづらくなったということ。

ウ 社会というソトでの緊張や疲労を、家庭というウチのいやくつろぎの時空間で解消するという構図自体が、近代社会の幻想だったのであり、SNSの登場によって個人は家庭以外の共同体に帰属意識を持ち始めたということ。

エ 内部空間とは人が無前提に自身を許容されると感じられる場であり、交渉が必要な外部空間に出ていくための拠点であったが、核家族が進むに従って家庭はそうした内部空間としての役割を果たせなくなったということ。

オ 内部空間である家庭内においては家族の一員として活動し、外部空間である社会に出た際には役割に応じて積極性を発揮するという了解は揺らぎ、家庭もまた構成メンバーの努力なしには維持できなくなったということ。

問六

次の文章は、本文中のどここの位置に挿入するのが最もふさわしいか。本文中の空欄イ～ホの中から一つ選び、その記号を記せ。

その上で家庭ほどおおよそ衣食住などの人間の生に関わる営みが日々繰り返され、共有しあう時空はなく、ここに人間の家庭の存在、その独自性を見出すことができると考えたい。

問七

問題文の内容と合致するものを次のア～オの中から一つ選び、その記号を記せ。

ア 「STAY HOME」という言葉がコロナ禍にあちこちで語られていたが、それを守るために家族間に深い亀裂を生じたケースも多く、家庭内暴力の増加など皮肉な結果になった。

イ 近代社会は利益の追求のために個人が家庭生活を犠牲にすることもいとわなかったが、世界中を巻き込んだコロナによって、改めて家庭が立ち返る場所として評価された。

ウ コロナ後の人間は世界の中心であるという認識を相対化し、自然とともに存在すべきであり、個々の人々にとって家庭や家族の在り方もまた見直されなければならない。

エ 家庭は歴史の変化には耐え難く、都市の人々の多くは各々の家庭を守ることから離脱しかかっていたが、コロナは新たに家庭内の結束を促すことになった。

オ 人間は自分自身で愉快的気分になることは不可能であるが、人との交わりによって意識を変え得るので、その拠点として家庭を過ごしやすい場にするべきである。

二次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

唐招提寺の建築美の分析は『古寺巡礼』において展開される建築論の中でも中核的位置を占めるものであるが、その分析の中で方法論的観点から見てまず注目されるのは、パースペクティヴの重視である。その唐招提寺論の冒頭、和辻は一行が正面からではなく、横の門から入ったことを強調している。それは疲労のためとされているが、しかし思いがけず目の前に開けたのは、「全然新しい美」であった。

和辻は言う。

「この堂の横の姿の美しさをわたくしは知らないではなかった。かつて堂の西側の松林のなかに立って、やはり斜めうしろから、この堂の古典的な、堂々とした落ちつきに見とれた時にも、あの屋根の力強さや軽さ、あの柱の重さや朗らかさは、強い印象をわたくしに与えた。しかしあの渾然とした調和や、底力のある優し味や、朗らかな厳肅などが、屋根や柱の線の微妙な釣り合いにかくばかり深くもつづいているとは気づかなかったのである。軒端の線が両端に至ってかすかに上へ彎曲しているあの曲がり具合一つにも、屋根の重さと柱の力との間の安定した釣り合いを表現する有力な契機がひそんでいる。天平以降のどの時代にも、これだけ微妙な曲線は造れなかった。そこに働いているのは優れた」

B の技術ではない。」「(『古寺巡礼』)

以上の唐招提寺側から明らかにするのは、和辻のパースペクティヴ、すなわち見る者の立ち位置に応じた見え姿の違いについての先鋭な意識と、美が立ち現れることを可能ならしめている因果関係についてのアイティオロジカル(原因論的)な分析である。と同時に、これら二つの方法論的要素もしくは視座と並んで注目されるのは、この唐招提寺論において風土への注目もまた認められることである。屋根の勾配の「美しい調和」についての緻密な分析を終えた和辻は、一息つくかのように、その眼差しを建物の周囲に向けて次のように述べる。

「大きい松の林がこの堂を取り巻いていて、何とも言えず親しい情緒を起こさせる。松林とこの建築との間には確かにピッタリと合うものがあるようである。西洋建築には、たとえどの様式を持って来ても、かほどまで松の情緒に似つかわしいものがあるとは思えない。パルテノンを松林の間に置くことは不可能である。ゴシックの寺院がああ優しい松の枝に似合わないことも同様であろう。これらの建築はただその国土の都市と原野と森林とに結びつけて考えるべきである」とした上で、「われわれの仏寺」と松や檜の関係性を示唆しつつ、「東洋の木造建築がそういう根源を持っていることは、文化の相違を風土の相違にまで還元する上にも興味の多いことである」(同)と述べる。

この和辻の文章を読んで思い出されるのは、かつてカール・レーヴィットがその論考『ヨーロッパの二ヒリズム』の「日本の読者に与える跋」で述べた辛口の日本文化論の一節である。少し長くなるが引用する。

「日本文化の、相反を含まない統一と単一性は、事実上、多くの確固たる伝統の完成に基づいている。それにしてもこの単調な統一性の内部には、安定せる幾つかの基本形の極めて微妙な変化と修飾の無限の多様性が発展している。それらはヨーロッパ的な眼と耳にはどうせ話らないものに見える。それはヨーロッパ人の感覚はこうした感じの上のニュアンスよりも寧ろ決定的な相反を掴むからである。或は、譬喩を以て云うならば、色と物の固いはつきりした形が、**D** ような日本の湿潤な風土に比べると、ヨーロッパの精神生活の空気は乾燥して潤いが無いからである。アクロポリスの裸の巖の上に立つ大理石の神殿と伊勢の杜なる木造りの神宮を拝したことがある人には、筆者のここに謂う意味が分るであろう。」

ここでレーヴィットは日本文化とヨーロッパのそれを比較し、前者の特徴が「相反を含まない統一と単一性」にあるのに対して、後者は「決定的な相反を掴む」ところにその特性があるとしている。その相違はまた「湿润」と「乾燥」(和辻の三類型では「沙漠」に割り振られているが)の対照としても表現されるが、ここで興味深いのは、和辻と同じく両者の対照の例として「アクロポリスの裸の巖の上に立つ大理石の神殿」すなわちパル

テノンが持ち出され、伊勢神宮と対比されていることである。この事実は、和辻とレーヴィットが日本文化とヨーロッパ文化の異質性について同様の直観を抱いていたことを物語るが、大きく異なるのは、レーヴィットが日本文化を「ヨーロッパ的な眼と耳にはどうせ詰らないもの」と切り捨てているのに対して、後に見るように、和辻は建築を始めとするヨーロッパ文化を極めて高く評価している点であろう。しかしそのことは、すぐ次に見るように、いわば「西欧の優越」^Fを受け入れることを意味してはいない。

例えば、和辻は唐招提寺金堂の屋根の曲線の美しさを称揚し、その美が世界にも類い稀なものであることを強調している。

「正面から見るとこの堂の端正な美しさが著しく目に立つ。それは堂の前面の柱が、ギリシア建築の前廊の柱のように、柱として独立して立っているからかも知れない。しかし屋根の曲線の大きい静けさもこの点にあずかって力があるであろう。もちろんこの種の曲線はギリシアの古代建築に認められるものではない。ローマ建築の曲線にはこれほど静かな落ちつきは感ぜられない。尖角に化して行こうとするゴシック建築の曲線は全く別種の美を現わしている。従ってこの曲線の端正な美しさは東洋建築に特殊なものと認めてよい。その意味でこの金堂は東洋に現存する建築のうちの最高のものである。」(同)

とは言え、先に指摘した和辻の建築論に見られる二つの方法論的要素は、日本とは異なるイタリアの古寺の分析においても大いに活用されることになる。

金堂に続いて、和辻は講堂についても言及している。

「この講堂はもと奈良の京の朝集殿であつた。すなわち和銅年間奈良京造営の際の建築である。しかし現在の建築には天平の気分はほとんど認められない。鎌倉時代の修繕の際に構造をまで変えたといわれているから、全体の感じは恐らく原物と異なっているであろう。もっとも内部の柱や天井は天平のままだそうである。堂の外観が与える印象はむしろ藤原時代のデリケートな美しさに近い。」(同)

この記述で注目すべき点は、「現在の建築」と「原物」の対比、言い換えれば「現状」と「原状」の対比、そのギャップについての意識であり、それは桂離宮論においても、重要な要素となる。

(三嶋輝夫『和辻哲郎 建築と風土』による)

問八 傍線部 a「渾然」、傍線部 b「稀」の読みをカタカナで記せ。

問九 空欄 A・B にあてはまる語句として最も適切なものを、次のア～オの中からそれぞれ一つ選び、その記号を記せ。

- | | | | | | | | | | |
|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|
| A | 評論家 | イ | 芸術家 | ウ | 預言者 | エ | 教育者 | オ | 資本家 |
| B | 趣味人 | イ | 研究者 | ウ | 初心者 | エ | 優等生 | オ | 工匠 |

問十 傍線部C「風土への注目もまた認められることである」とあるが、その後の文章の中で、具体的にはどのようなことを指しているか。その内容としてあてはまる最も適切なものを、次のA～オの中から一つ選び、その記号を記せ。

A 寺院の美を建造物単体としてではなく、日本の気候風土に育まれた松や檜との取り合わせにおいて評価すること。

I 寺院の美を屋根の勾配といった部分としてではなく、伽藍全体の調和の中で捉え直して評価すること。

ウ 寺院の美を建築様式が生み出すものとしてではなく、日本の古来からの精神性が宿るものとして評価すること。

エ 寺院の美を外形としてではなく、柱や屋根など建造物の資材が日本の風土の中で生まれたことを評価すること。

オ 寺院の美を建造物としての特徴と捉えるのではなく、外光など季節の変化によって情趣が加わるものとして評価すること。

問十一 空欄 D にあてはまる語句について、最も適切なものを、次のA～オの中から一つ選び、その記号を記せ。

A 木造建築であるために環境と境目がなくなってしまう

I 記憶の中の過去の形を呼び覚まし時空を超えてしまう

ウ 松や檜などの樹木に彩られ大自然と一体化してしまう

エ 凡てを包み凡てにしみ込む霧と霧の中に消えてしまう

オ 曲線により構成された屋根が風雨を手なづけてしまう

問十二 傍線部E「和辻とレーヴィットが日本文化とヨーロッパ文化の異質性について同様の直観を抱いていた」とあるが、その内容としてあてはまる最も適切なものを、次のA～オの中から一つ選び、その記号を記せ。

A 建築における日本文化とヨーロッパ文化を把握する判断基準として、空間認識としてパースペクティヴを意識するか否かに差異を見出していたということ。

I 建築における日本文化とヨーロッパ文化を把握する判断基準として、それまでの時代に培われた伝統への異議申し立ての有無に差異を見出していたということ。

ウ 建築における日本文化とヨーロッパ文化を把握する判断基準として、デザインに見られる背反の意識や環境における湿度の多寡に差異を見出していたということ。

エ 建築における日本文化とヨーロッパ文化を把握する判断基準として、建造物の機能性と装飾性のバランスに差異を見出していたということ。

オ 建築における日本文化とヨーロッパ文化を把握する判断基準として、色彩とフォルムのかもしだす空間の独自性に差異を見出していたということ。

問十三 傍線部F「西欧の優越」を受け入れることを意味してはいない」その内容としてあてはまる最も適切なものを、次のA～オの中から一つ選び、その記号を記せ。

A 唐招提寺金堂の美しさには、柱の形状などギリシアやローマの建築から影響をうけている箇所が少なくないが、影響を受けたことで優位に置かれるとは限らない。

I 唐招提寺金堂の屋根や前面の柱は、他のどれとも比較することのできない唯一無比のもので、西欧の建築物と比較することは愚かなことなのである。

ウ 唐招提寺金堂の美的な価値を表現するためには、客観的な尺度が不可欠であるが、そのために建築の歴史において日本に勝る西欧の基準に合わせる必要はない。

エ 唐招提寺金堂の端正な美しさを、原因論的に説明するためにギリシアやローマの建築と比較対照してはいるが、西欧の建築を先行する本来あるべきものとしてはいいない。

オ 唐招提寺金堂は屋根の曲線美において東洋の建造物の筆頭に位置するが、それはギリシアやローマなど西欧の建築の美しさとは無関係である。

問十四 問題文の内容と合致するものを次のA～オの中から一つ選び、その記号を記せ。

A ヨーロッパの建築評論家にとって、日本の建築はその装飾の無限の多様性によって注目を集めたが、和辻哲郎からすればそれは見当外れな評価基準であった。

I 和辻哲郎の観察眼は、全体像をとらえることに留まらず、ともすれば見落としがちな職人の細部にわたる技巧がもたらす効果についても及んでいる。

ウ 和辻哲郎の、建築を視座として日本文化と西欧文化とを比較対照するという大胆な文明論は、それが歴史の展開を映す鏡であることを教えてくれる。

エ 建造物の有機性は、建立当初に設計されるのではなく、それを改良しながら後世に伝えて来た者たちによって日々創られている。

オ 和辻哲郎は建築物の美を評価する際に、それが生み出された時点と現存している現時点の双方にまなざしを注ぎ、その差異を丁寧に通るという方法を駆使した。

〔以下余白〕

問七

問六

問五

問四

問三

問二

問一

a

b

〈R05172081〉

受験 番号	万	千	百	十	一
カナ氏名					
氏名					

(所定欄以外に番号・氏名を書いてはならない)

2023年度

国語

(解 答 用 紙)

No.

1

 /

2

採点欄

(この線で二つ折りにして書きなさい)

問十四

問十三

問十二

問十一

問十

問九

A

B

問八

a

b

2023年度

国語

(解 答 用 紙)

No.

2

 /

2

採点欄